慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦時都市経済論序
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1942
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.36, No.5 (1942. 5) ,p.401(41)- 425(65)
JaLC DOI	10.14991/001.19420501-0041
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19420501-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

られていゝであらう。即ち、工場勞働者の場合には—9.5%±1%——八・五%から一〇・五%、鑛山勞働者の場合には——11.5%±1%——一〇・五%乃至一二・五%が、最近に於ける工、鑛業勞働者の不可避的移動としての死傷病生産脱落者の割合であると推定せられる。そしてこれを一般的にいへば、元來死傷病生産脱落者の割合に於いて大きい女工の、勞働者全體の内に占める割合が、最近に至つて益々低下し來つたことが、工場勞働者の總體としての死傷病生産脱落者の基準を明かに低下せしめ、これに反して、元來との割合に於いて比較的高い男鑛夫の、鑛夫全體の内に占める割合が、從來に比して尚ほ幾分か高いことが、鑛山勞働者の總體としての死傷病生産脱落者の基準を、最近僅かではあるが、上昇せしめようとする傾向を示すに至つてゐると考へることは理論上當然の歸結である。（註）

更らに此處でもう一つ注意すべきことは次ぎの點である。即ち、前節中にも一言して置いたやうに、吾々が過去の經驗から確定したところでは、工、鑛業勞働者の死傷病生産脱落者の割合の基準は、大體同率であると考へられる。しかしそれは偶然の一致であつて、現實の勞働事情の變化如何に應じて、その割合が離れることのあり得ることを、特に指摘して置いたが、右の推定の如く、最近の場合は正にこれであるといつていゝ。

既に理論上、不可避的移動としての死傷病生産脱落者の割合が、最近では右の如くであると推計せられるとすれば——勿論、尚ほ色々な點に於いて、これに理論上の修正を加へることが必要であらうけれども、實際問題に對する基準としては、これだけでも充分役立ち得ると考へられる——吾々はこれを一つの基準として、全く非生産的現象であるところの死傷病生産脱落者の減少に努めねばならない。そしてこれが勞働力の持久的保持に關する、今日の勞働者政策の一つの重要な課題である。（終り）

註　最近見ることの出來た「勞働時報」（昭和十七年一月號）に、昨年末の勞働者數調が發表せられてゐるが、これに依れば勞働者の性別構成は次ぎの如くである、即ち、工場勞働者中男工は七一・三七%、女工は二八・六三%であり、鑛山勞働者の場合には、男工が八七・六六%、女工が一二・三四%であつて、昭和十五年末の場合と左程大きな相違はない。

戰時都市經濟論序

奥井復太郎

はしがき

現代大都市に關する社會・經濟的研究は既に「現代大都市論」の一冊に纒めて之れを發表したが（昭和十五年九月有斐閣出版）其の當時既に幾多の點で研究及び觀察の對象が時勢の進展、世相の變化に押されて從來ありし姿から著しく變貌を來してゐる事に一應の注意を拂つておいた。（同書結論「現代大都市の交化と問題」參照）然るに昭和十六年十二月八日以來、數ヶ月を出でずして我國は世界史的展開に於いて一世紀の經過にもまさる程の偉大なる業績を成就した。從つて既に若干の變貌を認めたりと雖も此の「現代大都市論」を今日手にして見ると其處に著しい隔り、正さに一時代の隔りの存するが如き所感を印象せずにはおられない。勿論それは「現代大都市論」に於いて述べられ指摘せられてゐる諸事實が虚構となつたといふ意味ではない。殊に都市形成の根本的過程に於いては恐らく少しの變化も無からう。唯その過程の生起する基底又は之れを取りまく諸條件が著しく變化して了つたが故に形成せられた都市の態樣も之れに應じて變相すると云ふのが正しい觀方であらう。同時に生活そのもの、殊に其の内面的なものは善意惡意を問はず必ずしも新しき變化に直に順應するといふ性質のものでない。玆に克己抑制献身等の精

神的努力に對して注意が喚起せらるゝ必要があり、更に國民生活の、もつと奥深い所に觸れて、即ち日本精神的なるものを振起せしめて一定の方向に歸一せしめ樣とする必死の努力が拂はれるのである。（週報第二八六號、昭和十七年四月一日號、戰爭生活讀本を參照せよ）故に當然轉換期の混亂が發生する。しかし變貌それ自體はそのまゝ混亂ではない。變貌に混亂は必ずしも必然ではない。唯こ實際問題として既に固定されたもの、慣れたものが新條件の下に適應する場合、動もすれば舊態の露呈が起り勝ちであるが故に混亂の相貌を呈するのである。此の混亂を出來る丈け除去する事は施政者の最も心掛ねばならぬ所であるが、之れは本稿の課題埒外である。本稿に於いて序說的に取上げ樣とするところは、

「都市及び都市生活は一國、殊に世界的關係に於ける一國の社會・經濟的狀況の所產であるが故に世界史的意義を聖戰下に具現して行く我國が大東亞戰爭裡にあつて所謂新體制を驀へると共にその都市及び都市生活はどう變化したか」

と云ふ點を幾分なりとも體系的に普ねく展望して見たいといふ意圖に懸つてゐる。

故に各項目又は諸事實に就いての詳細な敍述論及、並びに其の全體的體系化の課題は此の序說の後に來るものであつて玆には其の方向に第一歩を踏み出すに止まる事を附言しておきたい。

一

戰時都市經濟の「戰時」といふ言葉に就いては一應註釋が必要であるかも知れない。之れは唯單に「戰爭中」といふ意味のものでない。從來の戰爭觀によれば「戰爭」はいづれもある時期を劃して發し其の時期を經て終止し一々に解決され從つて戰後の平和が回復したものとされてゐるが、玆に用ふる戰時といふ言葉はさうした意味のものではない。元來、過去の、我國を中心とした諸々の戰爭も決してその一つ一つが關聯も意味もない單孤の出來事ではなくして根本的元基より發生する一聯一貫的事件の繼起であつた事は改めて說くまでもない。唯從來我國が全く受動的であつた事が是等の戰爭をして恰も別々の出來事の樣な外見をとらしめ、或ひは支那事變すら大東亞戰爭の勃發まではそれ丈けで獨立した出來事の樣に思はせる外觀を呈してゐた。勿論大東亞戰爭と雖も受動的ではあつた。併し此の戰爭を契機として我國が判然と世界史的主動者の地位にある事を闡明した點は最早何人も認むるに逡巡せぬであらう。玆に於いて大東亞戰爭にはその完遂を除いて所謂平和の一陽來福があり得ない事は明白になつてゐる。總力戰體制が唱えられるのも高度國防國家體制の完備を主張するのも此の理に基くからである。從つて戰時といふ言葉は目下大東亞戰爭の作戰遂行中にあるのでそれに最も適はしく用ひられたのであつて、若し誤解を招くとするならば國防都市經濟と云ひあらたむ可きかも知れない。所謂戰時色なる言葉を以つて屢こ示された樣な輕佻浮華の考方――第二次歐洲大戰が勃發すると此の戰時色がすぐ流行化して巴里其の他の大都市の尖端的婦人の、服裝服飾等に示された樣なあゝした流行性と考へる樣な考方――と考へ違ひされて都市及び都市經濟の變貌を說くのでない點は充分認めてもらひたい。女が鐵兜風の帽子を被つたり軍服風の洋裝をしたりする事は決して玆で考へてゐる戰時下の都市生活の變貌ではない。それはむしろ、形が如何にあらうと從來の都市生活や理念の延長に過ぎない。

然らば總力戰體制から見た都市及び其の生活はどう云ふ風に變貌したか。之れを論ずる事は勿論頗る多方面に亘るであらう。市民生活に就いては新生活運動が唱えられ其の衣食住に就いて生活の刷新が叫ばれ要請せられ且つ實行されてゐる。形態的には都市計畫や國土計畫に於いて國防都市の完備が急務とせられてゐる、社會的にも從來の大都市生活には異色なものが生起しつゝある。試みに雜誌「都市問題」が時局に承應して其の編輯に異色を盛つた跡

を尋ねて見ると昭和十五年七月には「事變下都市の經濟活動」同八月には「戰時市民生活」同十六年十一月には「臨戰態勢と都市財政」同十七年一月には「戰時歐洲都市事情」同二月には「決戰態勢と地方行政の改革」を特輯し更に戰時下の諸問題中「生鮮食糧品出荷配給統制問題」（昭和十六年五月）「配給統制と都市の經濟活動」（同八月）「都市消費者組織」（昭和十七年四月）等を取り上げて問題としてゐる。是等は其の表題に戰時なる文字を明白に用ひてゐないが問題そのものが戰時下的である事は何人にも容易に親知せられ得るところである。要するに、之れによつて明白である樣に都市經濟及び生活のあらゆる方面に亘つて變換又は變貌を求める事が出來る。以下は大體、都市行政、經濟、社會、交通、都市計畫及び市民生活の六項目に分けて其の概略を語る事としよう。

二

先づ都市行政上から見ると如何なる變化が生じたか。之れを大局的問題として見れば地方行政の改革といふ問題になり國土計畫地方計畫の主張に對應して綜合府縣制又は地方制の行政整備の問題が取り上げられる。それは勿論、今次戰爭に先立つて既に十餘年以前から一部識者の切々と論じてゐた所であるが遂に聽かれる事なく臨戰態制下にまで進んで了つたのである。殊に所謂府縣封建制と稱する事情の下に物資出廻りの不圓滑が極度に痛感せらるゝに及んで數府縣を綜合化して地方廳の如き經濟・產業・社會・文化的に合理的な國土地方化の單位を設立すべしと云ふ要求は强まつて來てゐる。

之れと同時に昔の郡役所の如き中間機關の設置も要望せられてゐると共に、東京市については都制即行の聲も大きい。

併し更に注目す可きは一都市の行政にあたる市役所それ自體が此の態勢の下に頗る時局的な變化を示した點である。戰時體制の强化と共に市が擔當する事務が頗る複雜になる反面、取扱事務の數量も非常に激增した事は說明を俟つまでもなく明白である。然かも他方には勞力不足で殊に府縣廳又は市廳等から可なり多數の官公吏が近來盛んに南方に轉出する勢を見せてゐるから市政執務の難澁は想像するに餘りある。併し其の點は別として臨戰態勢下に市役所內に於いてはどんな機構上の變化を示したか。

市役所組織の內に時局な部課として指摘に價するものは總動員部、防衞局（部）時局部、消費經濟部、物資調整部、市民局、町會課軍事援護課等で、總動員事務、防空事務、配給統制消費規正に伴ふ事務、町內會整備、軍人援護厚生に關する事務等に就いて最も良く時局性を示してゐる。（小古間隆藏氏「戰時體制の進展と市の分課組織の變遷」雜誌「都市問題」本年二月號）企畫に關する部局課の如きも一見、時局にのみ結びつけられるもので無いと思はれるが「市政が戰時體制下從來の所謂自治行政から國策遂行の一翼として國政化する全體主義的轉換に當り、新規の行政事務に應接の暇がない實情から行政の合理化綜合統一化の要請に基づくもの」（前揭書）として時局下に於いて最も大きく浮び上つたと云へるであらう。反之、觀光事業に關する課の如きが特殊の都市は別にして他の都市に於いては後退したといふのも當然であらう。

斯くの如くして市役所內の組織には從來見られなかつた事務、殊に最も複雜を極める事務が現はれて來た。恐らく是等の事務、即ち如上の部局課が具體的に取扱ふ事務を詳細に羅列したならば何人も其の複雜なるに驚くであらう。試みに前揭小古間氏の論文から「總動員」部に關する事務の一部を轉記すると、元來が國民精神總動員運動に由來する此の運動が「單なる精神的運動として儀式的行事乃至犒軍、傷病將士ならびに遺家族慰問、職域奉公等に止まることなく、廢品回收、代用品奬勵、消費節約、國債應募、貯蓄奬勵等の生活改善運動となり、東亞共榮圈指導者

として文化振興運動となり、上意下達下意上通の組織として大政翼贊會の生れるまでには幾多のめまぐるしい活動と組織の改革がつゞけられた。各市においては國民精神總動員運動實行部を設け、あらゆる團體を總動員して宣傳的活動を行つたのに始まり、やがて市・區・町内會・隣組の常會開催にまで實質化した」のである。而して此の町内會・隣組の整備運動たるや之れ又、其の性質上頗る繁瑣な事務である事は云ふを俟たない。町内會を通じて市民が區又は市當局に如何に複雜にして煩勞なる接觸をしてゐるか既に周知の如くである。

此の事情は小古間氏の指摘してゐる樣に統制强化に伴ふ國政激增を處理する中間組織として市町村が當然負荷しなければならぬ所であるが、其の處理上如何に合理的に改良せらるべきかは別問題として、玆に戰時下都市生活の變貌に直接關係のある公共組織そのものゝ變轉を如實に示してゐる。

三

次に經濟の部面で見ると先づ第一に都市の性格が著しく工業的構成になつて來てゐる。都市人口の職業産業別構成の新しい統計が示されてゐないからして、其の方面から此の問題に進む事は出來ないが、六大都市及び重要工業地帶を含む六府縣に於ける工業集積の狀況を見ると此の間の事情は推測がつく。即ち昭和五年に於いては大阪・東京・兵庫・神奈川・愛知・福岡の六大府縣に於ける工場勞働者數の全國割合が二五・三％、工場生産額の割合が五七・三％であつたに對して昭和十三年には前者が五五・一％、後者が六六％に增加し來てゐる。（「日本都市年鑑」第十一卷）昭和十三年以降の傾向に就いては改めて說くまでもなからうし、又別の方面から觀察すれば川崎市が昭和十五年度の國勢調査に於いて三十萬人に達して內地都市順位の九位を占めるに到つた事も都市の工業的構成を有力に物語つてゐる。是等の都市に國防色の勤勞者姿が到る處で氾濫してゐる事も吾々の日常觀察し得る所である。他方昭和十五年以降著しく增加した新興都市、殊に新たに市制執行を見た都市は其の本源の新古に拘らず新たに勃興を見た契機は工業的勢力に基くものが少くない。都市そのものゝ本來の性格が工業的であるといふ解釋は必ずしも筆者の贊する所ではないが工業の集積が人口の集積に著しく貢獻する事は疑なき所であつて、此の意味で過大都市分散を工場分散に求めた事は正しい。其の限りに於いて急激なる諸都市の發展が工業的であつて多くの都市が工業的構成を著くし工業的性格を濃厚にしてゐると云へる。（「三田學會雜誌」昭和十六年七月號拙稿「本邦都市發達の近狀」參照）。

反之、統計的には明示し難いが商業、殊に小賣商の整理統合によつて都市に於ける商業的勢力に後退を見た事は察知するに難くあるまい。後段にも述ぶる樣に都市の商業には其の所謂都市的特徵、其の典型は小賣（百貨店）が濃厚であり此の點、小都市又は町や村落に於ける小賣商業 其の典型は荒物屋（よろづ屋）と全く異る存在であるが戰時編制の打擊は前者に最も著しい丈けに都市の商業的構成及び性格に著しい變化の現はれるは當然である。此の點に就いての新傾向に就いては此の項の後段に讓る。

都市人口の職業構成に就いて更に察知出來る點は公務自由業の比較的增大ではないかと思ふ。一方に國土計畫その他で分散論が唱導されるにも拘らず、各方面に於ける統制强化は中央官廳及び其の他の中央機能の强化と共に之れを著しく膨大せしめてゐる。從つて此の方面に於ける人口比率の增加は若し職業統計の最も新しいものを利用する事が出來たならば恐らく之れを實證する事が出來るのではなからうかと思ふ。更に同じく都會的生活に最もよく附隨する家事使用人も昨今の事情よりすれば可なりの減少を示してゐるのではなからうかと思はれる。

要之、都市人口の職業構成は、勿論各都市自體の性質によつて必ずしも一樣で無いが、大體に於いて相當又は可

なり著しい變化を生んでゐると想像する事は許されるのでなからうか。

更に經濟的方面に就いて見れば企業の整理合同、統制の強化は都市の中心的機能を益々強化したと云へる。大東京の老大なる人口增加は正しく其の證左であつて、殊に東京を中心とする、殆ど全國的な交通混雜は中心强化の一具體例となり、中小商工業者の轉失業問題も或は都市の體制として都市としての問題を藏してゐる。東京市民の滿蒙移出が傳へられてゐるが、滿蒙移民が從來、農村的にのみ限定せられてゐた事情から見れば正しく一箇の怪奇的現象と思はれるであらうが、之れこそ戰時都市經濟の別の一面たるを失はない。

併し都市自體の內にあつて最も顯著なる變化を示したのは何と云つても配給組織であつて配給統制は確かに從來の都市生活が豐富なる物資の極めて潤澤なる配給の上に營まれてゐた丈けに此の變化は確かに根本的である。生活必需品其の他の物資配給の情況が市民に及ぼした影響に就いては後段の市民生活の項に於いて述べる豫定であるが、玆では配給統制の必然的現象として配給組織の變革に就き、若干の問題を指摘して見たい。

物資の配給が切符制割當制になつた事に就いては別に玆で問題にしない。たゞ切符制又は割當制に於ける配給標準の問題並びに配給組織の地域制の問題は一應取り上げて見る必要がある。

豐富なる物資の供給を受けてゐた市民が必要物資に就いて切符制なり割當制によつて供給量に一定の制限を受けた事は其の生活上いづれにせよ一打擊であつた。何等かの機會に指摘しておいた樣に米穀の配給割當、更に通帳制が行はれるに至つて國民の時局認識が俄然改まつた事は遺憾ながら事實であつた。砂糖殊に味噌醬油の割當制は此の時局的覺悟を一層痛切のものたらしめ衣料切符制に至つては、來るものが當然來たとは云ひ乍ら市民をして配給物資の數量に對して愈々生活設計を愼重ならしむ可き必要を痛感せしめた。唯食料品の場合と異り、衣料に就いては所謂ストックなるものがその當初に於いては比較的に潤澤であるが故に市民をして直ちに數量割當による不足感を懷かしめぬであらうが、一度やゝ長期に亘つての見透しを行へば之れ又容易ならざる設計の必要を自覺するであらう。

いづれにせよ、市民にとつて一方には切符割當制が確實に物資配給を受け得るといふ安心を得たと同時に舊來からの生活習慣よりして其の配給量は頗る苦痛的であつた（之れは配給統制上當然な論理であつて配給統制はその量に於いて必然不足的であるべきもので、其の爲めに消費規正が問題となるのである）しかしかくの如き配給物資中最も其の量及び標準に就いて困難であつたのは木炭の配給であらう。之れは各世帶の人數・居住情況・生活事情によつて頗る複雜なる變化を示すが故に米又は砂糖の場合に於ける程簡單ではない。恐らく配給計畫に於いて之れ位標準の確定に困難なものは恐らく他にあるまい。

併し配給標準の問題は地域性の問題と結びつけるとなほ更、困難を倍加する。今日配給數量の決定及びそれが適用せらるゝ地域は常に市町村の各行政區域を以つて範圍としてゐる。然かるに市町村の行政的區劃たるや、社會上の實際地域とは必ずしも一致してゐない。砂糖配給のはじめに當つて東京・横濱の兩市にはさまつた川崎市或ひは近隣町村は非常なる砂糖入手難に襲はれた。今日に於いては切符制が普遍化してゐる故に此の困難は克服されたが市部郡部の別による配給標準の相違は少なからぬ不均衡を實際市民に感ぜしめてゐる。殊に近來各都市（市）が近郊又はその遠方の村を合併して市域を擴大し、又小さい町が附近の數ケ村を合併して市制をしく事實が多きにつれて、此の不均衡は相當著しくなりつゝあると考へられる（此の市域擴張及び近來市になつた小都市が比較的廣大な市域を持つといふ點については小古間氏が第七回全國都市問題會議總會文獻に研究報告を寄せてゐる。「市域に見る都市

發展の動向」參照）此の事は生活實態が從來のまゝの農村的であり乍ら、形式上では市民化して、都市の文化性を容認せられた市民的標準を賦與されるといふ結果になつてゐる。之れは砂糖及衣料切符制に就いて云ひ得る所であつて此の點は消費規正が徹底化を要望せらるゝ反面には愼重に考慮せられて然る可きである。殊に大都市にありては家庭向配給以外に業務用配給に依存し得る事情が多分存するに對し市域外なる郊外生活者は（之れもその生活に於いては立派に市民的であるが）郊外地の性質上是等の外部的設備に全く缺けてゐるが故に（「現代大都市論」第三章第五、六節「郊外社會に關する研究」參照）那部的家庭向配給量にのみ依存せざるを得ない爲め、その打擊は緩和の途を見出し得ないのである。此の點では內務省が町內會部落會を整備するに當つて市・町村の行政區劃に必ずしも依據しなかつた點は充分敬意を拂はれていゝ。（雜誌「大大阪」四月號拙稿「町內會法制化に際して註文若干」參照）

配給統制上、機構的に近く重大な機能を以つて現はれて來たのは町內會である。町內會の社會的性格については次に述べるが町內會部落會が配給機構上の重要なる組織となつて來た事は、近來如何に各市民が物資の配給について此の組織によかれ悪しかれ依存する所頗る大となつた事實によつて說明せられる。町內會が斯くの如き配給機構上の當然なる組織たるや否やに就いては再考すべき問題もあらうが、配給物質についての不自由は、配給方法についての不自由に關聯するものであるからして（その實例、遠方買出と買出行列等）玆に配給組織の地域性の問題が登場して來るに到るのである。

小賣配給機關は其の性質上元來が地元的であるのを通例とするが大都市にあつては購買の爲めに費す地理的距離は此の地元性を喪失せしむる迄に長大なるを原則とした。しかし戰爭以前から小賣商問題の對策として地元商人の問題は相當早く取上げられ筆者の如きも二、三年前に小賣商問題に就いて其の地域性による改造を論じた事があり（雜誌「經濟マガジン」昭和十五年五月號參照）昭和十三年、漸く町內會整備の問題が擡頭した頃、町內會の果す可き機能の內に、之れが地元商店街の形式に現はれる配給職分に結びつく可き可能性ある事を指摘した。（「現代大都市論」第五章第三節參照）町內會が物資配給について切符制その他で重要な機關になる反面、消費者組織を町內會單位に設定するといふ事は今日その實現を必要化してゐる傾向にある。例へば名古屋市の配給地區制の試みがそれで、配給地區は町內會の地域を基本とせしめられてゐる。（「都市問題」四月號佐々木久兵衞氏「綜合的配給統制と協同的消費規正の基礎としての配給地區制を中心として」此の論文の表題は、消費者組織及び之れについての町內會の關係等の問題が今日如何なる約束の下に生れてゐるかを良く示してゐる）。

斯くの如きは近隣社會の組織化に於いて大都市生活の問題を幾分なりとも解決して行かうとする立場を持つ者にとつて誠に希望多き試練と云はねばならぬ。殊に戰時態制の意味を冒頭に述べた意味に解釋する上からは、之れは正に正しき社會集團形式として決して一時的ならざる性質の企圖と云ふ可きである。（「現代大都市論」第五章第三節參照）

三

次に大都市社會の構成上に於ける變貌に就いて觀察すると、先づ之れを町內會組織の問題として取り上げたい。元來町內會的組織は隣保社會の組織化であり地元社會の自律全一性を目的とするものであるからして本來の性格から云へば最も現代大都市の構成からは遠去つた存在と考へられてゐたのである。

都市社會の特徵に就いて、「村落小都市生活を特徵づける第一次的群關係がもう一層複雜なる何物かに移つた時、近隣的關係が分裂し、各種の關心に應じて分離した一層小さな、一層孤立した單位となつた時、其の共同體を都市

と呼び得る」と社會學的に定義づけられてゐる事によつても明白の樣に地元社會の有効な組織化は現代大都市社會に於いて異質的のものと見るが一應は至當であらう。既に「現代大都市論」に於いて指摘した樣に大都市社會は地域的に流動の社會であつて市民生活が全面的には地域に固定せらるゝ所なきが原則である。それ故、定着固定の生活が常態であつた者の隣保組織や現在の農村の地元關係を其の儘現代大都市社會に再現し樣とする事は餘りにも無謀である。併し現代大都市の內部は其の構成に於いて頗る複雜であるが故に舊社會的な殘滓が停滯してゐる地域も皆無でなく、又其の生活に於いて比較的に固定的である地元的地域も存在するのも事實である。唯々甲の地域に於いて成功した組織や手法がそのまゝ性質の異つた乙の地域に於いて成功するとは全く豫想出來ないのが當然である。此の意味で現代の町內會組織は新しい要求の下に新しい組織と手法とによつて生れ出る可きものであると考へるのが當を得てゐる。

町內會及び隣組の如き組織が如何にしてその必要を感ぜられるに至つたかに就いては既に拙著に於いて論じた所であるからして茲には省略するとして、「支那事變以來、國民精神總動員の實踐、都市防空、銃後後援、貯蓄奬勵その他の事業を擔當して益々重要な役割を演ずるに至つた。」（「日本都市年鑑」第十一卷Ⅲ市政組織の項參照）斯くして昭和十三年以來東京市、大阪市等に於いて漸く活潑な組織活動が見られるに及んだ。しかし町內會組織が更に重要になつたのは戰時生活規正が重大化し生活必需品の切符による割當配給が實現せらるに到つてゞ、町內會隣組は是等配給の主要補助機關となつた。當時「物を配給する時だけの隣組」といふ表現で、一般市民の町內會隣組に對する浮淺なる關心も一度、事、必需物質の配給に關するや忽ちにその態度を變へた「現金さ」を諷したものであるが、今日に於いては諷刺揶揄の餘猶のない程、戰時生活に密着して了つた。內務省の昭和十五年九月の訓令、部落會町內會等の整備要領を以つて茲に全面的な積極性が賦與せられ、今日に於いては其の法制化實現の機運にまで到達してゐる。（「都市問題」四月號「町內會に關する研究要綱」參照）其の結果昭和十五年末に於ける各市の隣保組織整備に就いては整備完了せる町內會數三五、五二〇、整備未了の町內會數は一、九六〇で前者の割合は九二％に及んでゐる。勿論組織整備に於ける是等の好成績が組織運營上の好成績を示すものではなく、反對にあらゆる方面に於いて不平衝突抗爭の諸事實があり、或ひは形式的整備に止まつて實質的活躍に關しては極めて冷淡なるものすらあつて、其の成績未しと云ふ感あるは、前述の如く大都市社會の性質上先づ止むを得ざるものと云ふべきであらう。併し他方既に述べた樣に戰時態勢下にあつては之れ以外にあり樣なき事態に置かれてゐる事實から見て若干の指導敎化及び改良が町內會組織の運營を一層良好ならしむるを得るものと期待して差支あるまい。

既に述べた樣に大都市社會が極めて旺盛なる「流れ」に乘つた流動的生活を營み通勤通學娛樂等々に何れも相當の長距離を日夜往復する事を以つて原則とし、其の爲め地元社會の結集の機緣を害してゐるといふならば、是等流動の現象を阻止する情況の發生は町內會組織の强化に資するものと云はねばならぬ。而して是等情況の發生に就いて見るに通勤の現象は之れ今俄かに變更するの情勢を見出す事は全く不可能である。大工場が市外又は近郊に轉出したる場合に於いてすら、其等工場地帶化した所では既に工場通勤に相當の交通時間と距離とが附隨してゐる（例へば京濱工場地帶）其の結果工場を中心として關係者を附近に結集せしめるといふ方法は殆ど實現不可能である。職場遠隔の地に居住する事の諸般の不利は論ずるまでもなく痛感せられてゐる故に、近來所謂住宅交換の試みが取上げられた。即ち本年二月一日より東京・橫濱・川崎・橫須賀の四市に於いて住宅交換を斡旋する事となつた。「都市問題」三月號都市クロニクル欄參照）、其の効果に就いては未だ之れを論評す可き時期を經てゐないが、其の企圖自體

としては適切たるを失はない。唯々居住事情は我國家族制度の下にあつては一勤勞者の便宜のみを以つて之れを決定する事の出來ぬ事情にある事を看逃してはならぬ。

或ひは又近來交通難解決の一助として旅行制限の主張も屢々耳にする。併しかくして制限せられ得可き旅行は當然不要不急の旅行であつて玆に云ふ通勤通學の如き「動き」を問題とするものでない事は自明である。通勤事情に於いて今日の狀態が幾分不可避に近いとするに反し、通學事情に關しては本年新たに試みられたる中等學校（公立）學區制がある。即ち東京府に於いては市内を四區に分ち區域内の學校に入學志願させる事とし、他方通學距離三キロ以内又は徒歩乘車通計三十分以内ならば、いづれの學校にも志願出來得る事とした。前段の規定は兎に角、後段の規定は通學の長距離化を防止する建前からは當然な措置といふ可きであらう。

唯々學區制に就いては學校配置が毫も此の趣旨に基いて行はれてゐなかつた從來の現狀に對し、直に此の方法を試みる事の失當なる點が指摘せられるが、其の是非はさて措いて、中等學校通學なる事實が地域的限定を蒙るといふ趣旨は少しも不合理ではない。唯、全體が之れに基調を合せて設計せらる可き必要が益々痛感せらるゝのみである。學區制は交通難の解消、徒歩通學の奬勵に眼目が置かれてゐるが、單なる近距離徒歩通學の奬勵は玆で云ふ長距離通學による「動き」を制約するものとはならぬ。此の點、教育機關の地元化それ自體によるの外、此の「動き」を止める方法は無い。

購買・娯樂其の他に關する動きに關しては、聊か事情が從來とは異つて來たものゝ如くである。之れは配給組織の統制から當然生じた現象で從來の如き自由買廻りが不可能又は不必要となつた關係上此の點に於ける激しい長距離に亘る「動き」は當然後退して然る可きものと思はれる。併し日常の情況は必ずしもその通りに實現されてゐない

樣である。此の點に關しては次の交通の項に於いて再び論ずる。

戰時下大都市社會の混亂について尙ほ著しい事例は郊外生活の破綻とも云ふ可きものである。郊外社會の成立に就いては改めて論ずるまでも無く、現代の都市交通機關、殊に市外中・近距離交通機關の發達に俟つ所頗る大であつた。郊外地は自體が生活文化的に完成した爲めに發達したといふよりは、此の交通機關の完備により都會的文化の中心地に時間的には極めて近距離に結びつけられたが故に發展したのである。丁度一時代前の山の手と下町との關係が今日の郊外遠隔地と都心地との關係なのである。故に自動車交通の後退、一般交通機關の不便化は郊外生活者に多大の打擊を與へずには置かなかつた。完備した交通機關が突然、停止又は退化すれば是等遠隔郊外地の生活者は山中に置き去られた文化人そのまゝの姿である。然かも是等郊外地附近に大都市の近傍を溢出した工場が簇立に到つては郊外地生活者は益々從來の優良條件を喪失するに到るのである。此の意味の郊外生活の破綻が何れ程如實に現はれてゐるかは實際的調査によるの外、判明し難い。併し郊外生活者が從來享受してゐた約束が今日破れたといふ事、又それが必然に何等かの混亂と破綻とを生み出してゐるといふ事は推測出來ない事ではない。次の引用は必ずしも其の適確なる事例ではなからうが、郊外生活者が今日從來の生活樣式を脅かされるに到つた一證左には

なる。

「私の住んでゐる町は郊外にあつてインテリの多い靜かな町であつたが、近頃は工場が澤山できて町中職工諸君の黃色い作業衣で氾濫である。そして町が實に不潔になつてしまつた。

痰は吐きちらされる、いかゞはしい歌聲が街頭で聞える、古本屋では眞面目な書物を引こめて、卑俗な書物を並べたてた。痴漢が出沒し、夜、婦人は出歩けないと云ふことになつた。」（下略）（東京朝日新聞投書一五年二月）

五

大都市社會の姿である「動き」を中心として考ふれば玆に交通の問題が出て來る。大都市の交通禍に不死鳥の如き執拗さを持つて現はれる。之れは單に戰時下的影響の問題でなく、大都市そのもの〻從來の構成機構に伴ふ不可避的現象である。併し今日戰時下に於いては正さに其の禍難が幾重にも倍加して來たのである。故に東京市を中心としての帝都高速交通營團及び二月一日より行はれた東京市の交通統制（市内民間電車三、バス七が市電の手で統合經營せられる）は必ずしも時局的要請に基くものとは云ひ難いが時局がそれを促進した事は看逃せない。（「都市問題」十六年二月號近藤操氏「大東京交通課整問題の結論」參照）併しかうした措置の決定及び實行の以前又はそれと共に、交通機關の殺人的混雜は文字通りに物凄い。其の原因としては時局的影響の下に交通機關そのものが增加せる交通量（之れも時局的影響を多分に受けてゐる。例へば軍事及び軍需輸送の增加、大陸との交通の頻繁化、生産擴充の結果たる人的移動及び物資の輸送等が主な原因をなしてゐる。「日本都市年鑑」第十一卷一五七頁）に應へる事が出來ないのみならず自動車輸送の如き前項で述べた樣にむしろ退化の情況であれば其の混亂も亦當然である。事實東京附近に（東京驛を中心とした半徑三十哩圏内の諸都市に）昭和十年以來十五年迄の間に一〇〇萬を越す人口增加があり（その增加率約一六・八％、東京市の增加率は一五％）從つて交通流の增大は當然の現象であり、之れに該當する交通事業の擴大があつたかどうか、さうしてみれば交通難は當然すぎる位當然である。玆に交通機關經營の當事者が「歩け！」運動を唱えたり「乘るナ」宣傳を行ふ、一見逆説的現象を生み出し、國策輸送への協力、學生々徒又は一般市民の交通道德實踐が要望せらるゝ宜なりと云ふべきであり、正しく戰時的風景である。

併し此の混雜を更に惡化するものとして、具體實證的な數字を示す事は出來ないが、大都市交通流の内容及び構成が著しい變化を生んでゐる事を見受ける。それは職場通勤者通學生によつてのみ混雜するのでなくて從來のラッシュアワア人以外の乘客が頗る增加してゐる樣に見受けられるのである。其處には前に引用した樣に勞力の頻繁な移動があり或ひは從來なれば動かなかつた樣な市民が著しく此の交通流に集つて來た樣に見えるのである。實際此の種の乘客はラッシュアワア人的に交通混雜に慣れてゐない爲めに混雜に處する自他共に敏活なる動作進退を辨へてゐない。此の事は混雜を一層惡化するものである。

更にも一つの特徴は非常に携帶荷物の多く且つ大きい事であり年少幼者を伴ふ者の多い事である。携帶荷物の多く且つ大きい事は手荷物其の他荷物輸送についての鐵道省の制限或ひは或る種の物質に就いての輸送禁止等が影響してゐる事と思はれるし〻他面、不足物資の遠方買漁りの現象とも思ふ事が出來る。移動勤勞者の多い事も此の種の混雜を助けてゐる。子供隨伴に至つては家庭勞力の不足の表示とも見るべきであらうか。

是等の事情がさなきだに混雜する大都市交通を一層惡化せしめてゐると云つて差支ないと同時に之れこそ最も時局的な變貌の一つでもある。事實前項に述べた樣に遠距離流動を阻げる樣な素因が發生しつゝあるのに、他面正規ならざる交通利用者の激增と云ふ事は一見矛盾とも思はれる。併しこれこそ大都市社會の從來の舊態が殘存してゐる爲めと新しき體制及び組織が完備せられない爲めとに基くものであつて、最も卑近なる例を以つて云へば家庭及び地元的に配給せらるゝ物質の不足又は配給不圓滑を所謂「外食」によつて補ひ得るといふ都會的便法がなほ殘存してゐるからである。（「都市問題」四月號須田銓造氏「割當配給と消費者組織」殊に六七頁參照）或ひは又かの府縣封建制が此の異常なる「動き」を惹起せしめてゐる」原因である事もあらう。之れを要するに此の種の「動き」の阻止は所謂「外食」による補給又は外部への買漁りを幾分なりとも防止すると共に、或ひはその以前に家庭又は地元への配給

量を必要量に於いて確保する以外に方法が無い。此の事は前に述べた配給組織と消費者組織（地元性）の問題であり、同時に府縣封建制を打破して物資の全國的に圓滑なる配給整備をはかる問題でもある。

六

茲に於いて問題を都市・地方計畫の方面から眺めてみよう。

都市・地方計畫に關しては勿論戰時的に修飾された部分も決して少くないであらうが、現代大都市の物的環境や建築的整備の上に於いては既に此の時勢に先じてゐたといふ事を誇を以つて云つて差支ないと思ふ。昭和十五年近衛內閣の下で我國の國土計畫が問題になつた時、都市計畫論者はその手法が既に一九二四年アムステルダム會議都市計畫綱領の中に明記せられてゐる事を指摘してゐる。從つてロンドンが獨逸空軍の大規模な爆擊を受けた時、或ひは其の以前に於いて空爆の危險が豫想せられた時、過大都市ロンドン及び其の附近の工場集積に就いて分散の必要が痛感せられ、焦眉の急の如く騷ぎたてたが、都市計畫家又は都市改造論者は多年、社會學的乃至社會理想論的に自分達の主張してゐた事が爆彈の脅威によつて一般市民の覺醒の的となつた事に一抹の快感を味つたものゝ如くである。同樣に戰時下に於けるあらゆる方面の統制强化に就いても都市計畫關係者は既に數十年前から施行せられてゐる都市計畫法制こそかゝる統制主義の曙光であると觀てゐる。（「三田學會雜誌」第三十四卷第十號拙稿「計畫と統制」「三田評論昭和十五年十月第五一八號拙稿「空襲下ロンドンの教訓」同十一月第五一九號「國土計畫と工業分散―英國工業及人口配分委員會の報告」日本道路技術協會編輯「道路」第三卷第四號所載拙稿「防空と都市問題」參照）

故に都市計畫が國民保健なり經營經濟なり災害防止なり集團社會性なりの觀點から大都市開疎を主張してゐる事は頗る早かつたが、戰爭勃發と共に都市防空計畫は急速なるテムポを以つて徹底的大規模に實行せらるゝ樣な情勢を見せた。吾々はさう云ふものゝ一例として都市防空ブロックの設計を提示せられた。即ち大都市地域を幾つかのブロックに分ち各ブロックをして空襲の被害を出來る丈け僅少ならしめ、且つ火災の生じた場合にも其のブロック以外に擴延せしむる事のない樣に防火帶を以つてその地域を圍繞せしむるといふ計畫であるが、此の計畫が徹底的に行はれる爲めには相當廣大なる面積が防火帶及び防空廣場の爲めに使用せられて、今日見るが如き過密なる市街地を改造するものとしてはその實行に伴ふ影響は頗る大であると云はねばならぬ。これ資材勞力建物等の不足する今日に於いて早急に實行せらるべきものとしては多大の困難あるに當然であり、其の結果、建物の防火改修とか復興資材の整備とかゞ主な對策となるのである。家屋建築の過密を避ける意味での空地造成は確かに効果的ではあるが、昨年末決定を見た帝都周邊の大防空餘地計畫の如きは直接此の趣旨に沿ふものではない。

併し昭和十四年四月に改正せられた都市計畫法は舊來の交通、衞生、保安、經濟の四項目に加ふるに防空なる項目を新に掲げ、戰時的色彩を濃厚ならしめた。更に十六年一月十四日には「國土防空强化に關する件」を閣議正式決定となし、高度國防國家體制確立の爲め、從來の都市計畫・地方計畫をすべて防空の見地より建直し恒久的に國土防衞を圖らんとする事になつた。（「日本都市年鑑」第十一卷二二二頁）他方、民防空の組織が强化され、十五年十二月二十日から施行された改正防空法では所謂隣組防空活動が强化された。東京防空都市計畫の體系は昭和十五年九月十七日內務省から計畫案大綱が發表されてゐるが、それによれば（一）膨脹抑制及び疎開計畫、（二）防火計畫（防空ブロックの設定その他）（三）防護計畫、（四）避難救護計畫の四項目に分れ頗る廣汎にして綜合的なものである。

元來、空襲避難計畫についてはロンドンのエヴァキュエイションが其の一範例を示してゐるが改正防空法は燒夷彈落下に際して自衞的な應急防火を効果的ならしむるため、事前退去を原則として禁止制限してゐる。唯國民學校

及び之れに準ずる學校の初等科兒童には年齡七年未滿の者、姙婦、產婦、褥婦、年齡六十五才を超える者、傷病者、不具廢疾者にして防空に從事出來ない者並びにこれ等の者の必要最小限度の保護者は此の禁止制限から除かれてゐる。故に避難、殊に退去避難の問題は主として兒童避難の問題となるが、此の意味では前記の大防空綠地計畫の如きが之れに用意する所相當大であらう。併し更に注目すべきは此の退去避難の收容區域を更に遠距離（五〇―一〇〇キロ）の農村小都市に求める案で茲に地方と都市とのリンク制を設けせしめ樣といふ主張である。即ち非常事態に際會して突然、都市兒童を未知の土地に避難せしむるのでなくして平常より都市の一定地區の兒童は一定地方の一定農村又は小都市に連絡をつけしめて置く事で、「豫め避難地を決定、平常避難地住民と交情を溫め置く」方針によらしむるのである。斯くの如き避難計畫は最早一都市計畫で處理し得る所でなく、他の方面からも既に要望せられてゐる樣に、茲で都市計畫が當然、地方計畫にまで發展するのである。

然かも都市計畫が地方計畫に發展するについては、戰時的になほ別段の要請がある。それは都市食糧の自給確保であつて、都市食糧の一部について其の自給圈を持たうといふ計畫がある。例へば農林省は「大都市に野菜自給圈」計畫の對策をたて十七年度臨時追加豫算に九萬六千圓を計上すると報ぜられてゐるが、昨年夏以來大都市が野菜・鮮魚食料品の品不足・配給不圓滑に惱まされてをり、それに對しては、出荷統制、增產奬勵等の應急對策も講ぜられたが、長期貯藏保存の不可能な現在、一旦空襲等に依る交通杜絕の場合は、市民營養の給源である野菜等の配給が混亂に陷る恐ある爲め、かくも早急の立案となつた譯で、其の案によれば人口百萬以下の都市にあつては周邊十六粁、東京・大阪等の大都市では三十粁程度をその都市の「野菜自給圈」と指定し其の土地を高度に利用して大體擔當都市消費量の八〇％程度を確保せんとするもので、六自給圈が考慮されてゐる。即ち京濱・中京・京阪神・廣島・關門・長崎の六地區自給圈を設定する。京濱自給圈は東京、横濱、川崎を中心とし東京、神奈川、千葉、埼玉の各府縣に設定せられるといふ計畫で、主要防空都市に相當量の米、乾パン、乾麵、罐詰の分散貯藏をなす緊急食糧對策と共に之れによつて、都市々民の空襲時食糧が確保されようとしてゐる。（「都市問題」二月號時事欄の記事による）斯くの如き意味で近來、都市野菜確保の調査又は研究が著しく盛んになつてゐる。（同誌同號岩田穰氏「都市食糧殊に蔬菜確保の基礎調査に就て」、同誌、昭和十六年八月、九月、十月號宮出秀雄氏「大都市の食糧とその供給圈」等參照）

併し更に一歩進めて帝都防衛體制の强化を地方計畫的企圖に於いて大規模に行はんとする主張がある。例へば高原開發協會の安達巖氏によれば「帝都周邊の十六萬町歩に達する未開發高原を積極的に開發利用する方針の下に臨戰的防空對策を整備强化する事、即ち未開發高原に簡易なる避難施設を設けて不用不急の一部市民を此の地に避難せしむると共に、避難者及轉業市民、各種勤勞奉仕團員及地元縣民を動員して高原開拓に挺身せしめこれによつて帝都の食糧自給率を增强する」事が帝都防衛强化の唯一策と主張されてゐる。つまり帝都防衛の完備とは「首都人口の計畫的疎散と航空基地の分散多角化と、地域的食糧自給體制整備の三つに要約し得る」のであつて、此の原則に基いて栃木縣、群馬縣、神奈川縣、山梨縣、靜岡縣、長野縣に亙つて高原開發といふ事になるのである。（「都市問題」十六年十月號「帝都防衛體制の確化と帝都周邊高原の開發」）茲に前述した樣な意味での都市・地方計畫の姿を見る事が出來る。

併し他面、都市廣域計畫に伴つて都市內に於ける地元計畫も此の際必要である事を忘れてはならぬ。此の事は大都市地方計畫中に於ける衞星都市計畫に於いても必要であると共に、大都市內に於ける集團地區の設計に於いても必

要である。第一次的集團社會としての近隣社會性を確保し其の組織を強化する上に就いて其の形態的設計は特に必要である。殊に住宅營團の如き組織が住宅造營に邁進する時、此の點についての考慮を等閑視されぬ事を切望したい。此の點については既に拙著「現代大都市論」（第五章第三節）に於いても、又その他の機會に述べた事があるので茲には省略する（前出、雜誌「道路」第三卷第四號所掲、拙稿參照）。

戰時都市計畫は今日に於いて決して應急策とのみ稱すべきものではない。何故かと云へば第一に既述の如く其の對策は既に戰前二十年以前からも要請されてゐた所であり、第二には今次戰爭が冒頭に述べた如く高度國防國家體制の整備を要請してゐて、所謂、數年間を目標にして應急彌縫策たる事を許さぬ性質のものであり、第三には、事態が正さに斯くの如んば、應急策と雖も、將來への恒久的解決の見透しと之れに向つての對策の方向並びに體系の裡に求められねばならぬからである。

七

扨、最後に所謂都會生活の戰時下に於ける變貌を觀察してみよう。都市生活を消費の面から觀察すると其の特色となる所は豐富なる富と余暇とが生活の基底に存する事である。スモールが都市社會發達の經過を述べた所で農民聚落から所謂村落形態に移つた段階に於いて村の生活者の「余暇と身分」とを持つた職業人――例へば醫者・教師・警察官等――が出現して來て、彼等がそれまでの農夫とは勞働の性質に於いて、時間の余猶に於いて全く異つた存在である事を指摘し、茲に都會人と農民とが對蹠的になる過程の成立を觀察してゐるが、勿論全體がさうだといふ意味での全般的には適合しなくとも多かれ少かれ都市生活者は農村生活者に對して此の二點に於いて惠まれてゐると云つて差支ない。故に戰時下都市生活に於いて最も著しく修正せられ、殊に其れが外面的に目立つと云ふ點から見れば、從來の豐なる都市生活の基底であつた此の二點に就いて見る事が必要である。

先づ余暇問題から見ると都市生活に於ける余暇の性質は單に余暇が多いと云ふ事丈けでなく、余暇の時間的配置にも其の特色があつた。余暇時間の多いと云ふ事は余暇利用の組織化を意味する。茲に教養、保養、娯樂等の組織化を意味するのであるが、いづれにしても都市生活に於いては余暇及び余暇利用の生活が勤勞及び勤勞生活と堂々同列に置かれて――勤勞生活の蔭にでなく――存在してゐる事である。之れ都市有閑性が最も華美に表現化する所以であつて、又都市生活非難の最も見易い的となる所以である。第二の余暇の時間的配置であるが、之れ又都市的余暇生活をして最も顯著のものたらしめる特色を持つてゐる。一般的に云へば都市に於いても余暇時間は勤勞、大體に於いて晝間勤勞時間の後、即ち夕方乃至は晩乃至は週末に來るものであるが、都市生活者の一部には「朝から出歩く」可能性があり、殊に複雜なる勤勞組織は特別有暇者に非ざる者も、特定の日には他の者の勤勞時間に余暇を得てゐる。此の點つまり、娯樂、保養、遊興と勤勞とが時間的に併存してゐる事を示すもので、農村的生活とは凡そ著しい隔を示すものである。此の事が都市有閑性を一層顯著ならしめる。

是等の事情が戰爭の進展と共にどう變化したか。都市的有閑が著しく修正を蒙つた事は事實である。例へば學生に關して云へば上級學校に於いて就學期間が相當に短縮され其の結果授業時間の强化が學生余暇に喰込むと共に學校報國隊の活動はなほ余暇縮減に影響してゐる。一般市民に就いて見ても國民勤勞報國協力令の發布により市民の持つ余暇が極力時局的生產活動に振り向ける事になつた。殊に從來の平和的勞力配置が時局的に著しく改變せられた事は、間接的に余暇短縮に影響してゐる。即ち近來の家事使用人不足は從來それ等の勞力に依存して余暇を持つてゐた家族員の余暇を著しく減少せしめた。

他方余暇の利用的表現である娯樂享樂の機關設備はそれ自體が壓縮されて來たので玆に娯樂健全化が叫ばれる」面、なほ殘つてゐる余暇利用の適應を失つた貌が現はれてゐる。

第二の富力に關する點に就いては、云ふ迄もなく軍需財政上の緊迫せる要求に應じて一般市民は其の生活を樞力切りつめられる事になつたが故に、conspicuous consumption を本質としてゐる都市生活が著しい影響を受けたのは當然である。殊に必需品以外の所謂不急不要の商品の生產が整理され規格統一が行はれる結果、富力が持つ誇示性消費は全く縮減された。殊に衣料切符制の實施は此の傾向を著しく增大した。衣料に關しては從來最も複雜で流行性を持つたものであるが、切符制の結果、從來の如き流行性に基く廢品化は最早許されなくなつて衣料についても實質的なるものが最も尊重せらるゝに至つた。Variety の消失は都市消費の外貌に變化を惹起させ、消費の方向はかくて全般的に實質化さるゝを得なくなつた。國民服制定は其の一例である。故に享樂的消費の減失はあらゆる方面に深甚な影響を與へた。從來の買出品はいづれも高度の撰擇性を持ち之れが都心地の所謂中央盛り場を構成したのであるが、此の點では此の傾向が全く逆化してゐる。つまり買出品の性質が趣味享樂品でなくなつて生活必需品化し其の結果、從來の如く郊外地から中心地に向つて流れが逆流して都市內部から郊外又は近接農村に向つて著しい都會人の買出人が激增した。此の事は都市生活必需品配給不圓滑に基くにせよ蔬菜その他農產物の買出に田舍廻りに狂奔する姿は從來の都會人的矜持を放擲して了つたものとして頗る興味ある事實である。

斯くの如く「物」に對する欲求が「金」に對するそれよりも高まつた事は都會人の生活樣式に方向の變換を與へ、前述の余暇及余暇利用の壓縮と共に都會人の習性に複雜な影響を與へてゐる。複雜な影響とは、永い間是等の大都會的生活に慣れた市民にとつて此の急激な變轉は決して容易に順應し難いもので其處に諸般の摩擦の生ずる事を意味する生活合理化、新生活運動の起るのは其の爲めである。

結び

以上諸方面に就いての戰時都市の變貌は今次戰爭の性格に應じて頗る廣汎で且つ徹底的である。此の意味に於いて經濟・產業・政活の方面に於いて新體制が直接間接に市民の性格や生活に根本的な影響を與ふると共に市民生活の心的物的表現も著しく改變を蒙つた。其の結果として玆に混亂を惹起したが此の混亂に對處し、從來の都市生活の變貌を如何に指導して行くかの問題は又、別の問題である。一般的に云ふならば今次戰爭の性格に應じた對策、つまり恒久的全面的對策が講ぜらる可きであつて、既に述べた樣に應急策と雖も此の方向に於いてとられなければならぬのである。かゝる對策の具體的考究は他日の機會を持ち、玆には粗雜乍ら都市生活に及ぼした戰爭影響の一般を指示するに止める。